

国立民族学博物館研究報告別冊 no.011; 序論 : 資料と方法 : 資料の選定

著者	秋道 智彌
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	7-13
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003663

Ⅱ. 資料の選定

秋 道 智 彌*

1. 資料の選定	4. カード
2. コード	5. 地図
3. ワークシート	

本研究の具体的な作業と方策は、以下の三つに大別できる。まず、東南アジア・オセアニア地域にふくまれる諸民族とさまざまな文化の項目（要素）をそれぞれえらびだすことである。つぎに、文献および調査資料にもとづいて、選定した民族ごとに特定の文化項目が存在するのかないのかをしらべ、その情報を集積する。そして、この資料を基礎として、東南アジア・オセアニア地域における諸民族間、諸文化項目間の統計的な分析をコンピュータ処理によりおこなうことにある。コンピュータ処理の方法については次節であつかうこととして、本節では、資料の選定とデータの作成にかかわる経緯と方法について述べる。

なお、本報告は、昭和56～59年における共同研究「東南アジア・オセアニアにおける文化クラスターの構成と分析」の成果を継承、発展したものである [大林編 1985a; 1985b]¹⁾。したがって、もちいた資料と方法は前研究に準じ、あるいは改変したものである。

1. 資料の選定

1) 民族の選定

東南アジア・オセアニア地域のなかから、サンプルとなる民族を選定する前提として、対象となる地域自体について確認しておこう。本研究では、東南アジアの大陸部（ガンジス川以東）および島嶼部からオセアニア（イースター島以西）にかけての領

* 国立民族学博物館第1研究部

1) 昭和56年度の共同研究における代表者は、佐々木高明が、昭和57～59年度は大林太良がそれぞれ担当した。

域にふくまれる諸民族集団を対象としている。

さらに、いくつかの約束事をした。まず、中国南部における少数民族を東南アジア大陸部の民族として選定の対象にふくめた。マダガスカル島の諸民族は、東南アジアにふくめた。また、東南アジア島嶼部のなかにマレー半島部をふくめることにした。そのわけは、マレー半島の諸民族が東南アジア島嶼部の諸民族と言語的、文化的に近縁であると考えられるからである。さらに、オセアニアのなかに、ニューギニア島のイリアン・ジャヤ（インドネシア領）をふくめるが、イリアン・ジャヤ周辺の島嶼は、東南アジア地域（島嶼部）にふくめた。

民族選定のさいには、まずこの広大な領域をいくつかの地域にわけ、各地域ごとにふくまれる民族のリストアップが1981年10月～11月にかけておこなわれた。選定にさいして、大林太良、横山廣子らが中心となって利用できる文献リストが作成された。区分については、大まかな言語分類をおこない、さらに地域別に分類した。参考文献として、*Atlas of World Cultures* [MURDOCK 1981]、および *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia* [LEBAR et al. 1964]、*Ethnic Groups of Insular Southeast Asia Vol. 1* [LEBAR and APPELL 1972]、*Ethnic Groups of Insular Southeast Asia Vol. 2* [LEBAR and CASINO 1975]、*Völker der Vierten Welt* [LINDIG 1981] をもちいた。マードック (Murdock, G. P.) の文献中、本研究の対象地域にふくまれる民族数は、東南アジアから58、オセアニアから71の合計129であった。また、ルバー (LeBar, F. M.) の文献にふくまれる民族は合計312であった。もちろん、それ以外の民族についても、出版物として公にされていないが班員や国内の協力者自らの調査による資料が利用できる場合には、積極的に採用した。こうした情報による場合は、調査者のField Noteとして文献に記述した。

このようにしてまず、1981年度末に、302の民族を選定した。ただし、1981年における最初の選定時から、最終入力段階の1988年にいたる過程で、選定民族の総数は変化した。いったん選定はしたものの、文献からえられる情報量が予想外にすくないといった理由で不採用にしたり、班員の野外調査によって選定民族を新規追加したからである。結局、われわれが入力した民族数は、最終段階の1988年2月で、東南アジア地域（大陸部と島嶼部およびマダガスカルをふくむ）から138、オセアニア地域から99の合計237である。最終的に入力した民族名は、資料編の民族名リストにあげておいた。

2) 文化項目の選定

大林は共同研究会において、従来の研究者が東南アジア・オセアニア地域における

文化史や文化複合に関する民族学的研究のなかで、どのような内容の文化項目をとりあげてきたか、そしてそれらにどのような問題点があったかについての発表をおこなった(1981年6月15日、7月2日)。従来の研究との比較考察については、大林により第4章で詳述される。ここで強調しておくべきは、従来の研究では採用すべき文化要素がかならずしも文化のあらゆる側面にわたっていないこと、概して物質文化に精で、社会、宗教に粗である、東南アジア・オセアニア地域における文化の研究上、欠落している文化要素がある、といった指摘である。もちろん、われわれがあらたに文化項目を選定するうえで、先学の業績がずいぶんと参考になったことはいうまでもない。

以上の視点から、われわれは、民族選定の場合と同様にして、文化のさまざまな分野ごとに担当者をきめ、文化項目の選定にあたった。提出された原案を集計した結果、33の文化の諸分野について合計486の文化項目を暫定的に選定した。この数字は、従来とりあげられてきたものにくらべて格段に多くなっている²⁾。

原案を全員で討議した結果、われわれは大幅な変更をおこなった。原案との大きな修正点は、分野をいくつか統合ないし除外し、特殊すぎると考えられる項目も大幅に削除したことである。たとえば、文献だけからえられる情報量がかならずしも多いとはいえない言語の分野(助動詞、範疇詞、ことわざ、語順など)、人間の分類(性、年齢、専門別など)を除外した。

そして、まず大きな枠組みとして、文化の諸要素を、1. 経済、2. 物質文化・技術、3. 社会・政治、4. 宗教・神話、5. 知識・芸術の5大分野にわけた。さらにそれぞれの分野をいくつかの大項目別に区分した。たとえば、経済にかかわる分野を

2) 東南アジア地域、およびオセアニア地域における文化複合、文化史の研究において従来とりあげられてきた文化項目をみると、前者からは391項目、後者からは361の項目をそれぞれ列挙することができる。

東南アジア地域については、地域全体あるいはそのいくつかの文化複合ないし文化潮流によって特徴的と指摘されてきた文化要素を集成したものが以下にのべる領域である(括弧内の数字は項目数をあらわす)。

家屋(28)、服飾(37)、発火法・土器(7)、農耕(36)、漁撈(5)、食物・嗜好品(16)、武器(29)、戦争(5)、身体変工(9)、工芸(10)、交通手段(9)、社会組織(50)、法・礼儀(5)、宗教(50)、神話(2)、出産と子ども時代(13)、婚約と結婚(6)、死(20)、靈魂と精霊(8)、音楽(18)、言語(4)、娯楽(9)、美術(13)、その他(2)の合計391項目である。

オセアニア地域では、ミルケ(Milke, W.)による東南メラネシア研究、グレーブナー(Graebner, F.)、リヴァース(Rivers, W.H.R.)、シュパイザー(Speiser, F.)らによるオセアニア文化史の再構成の指標としてもちいられている文化要素として以下の項目が列挙された。それらは、衣服(32)、装身具(38)、家屋(28)、家具(43)、工芸・道具(33)、生業(26)、猟具(22)、航海・漁撈(38)、貨幣(9)、武器(51)、楽器(31)、その他の物質文化(10)の合計361項目である。

ちなみに、マードックの文献のなかでとりあげられているコラム(本研究の大項目に相当)は全部で26あり、さらに各コラムごとにそれぞれ5から10以上の下位カテゴリーがもうけられている。

狩猟, 漁撈, 農耕, 食物・料理法, 流通・交換, 交通・運搬, 船の7大項目に細区分した。そして, 各大項目ごとに文化項目を選定した。その数は, 大項目ごとに異なっており, 最小で6, 最大で25におよんだ。なお, まだ入力数がすくなかった1983年の3月段階で項目をあらたに二つ(槍と首狩り)追加した。このようにして, 27の大項目について343の文化項目を最終的に選定した。その一覧は, 資料編の文化項目リストに示した。

2. コー ド

民族名, 文化項目, 文献などの情報をコンピュータに入力するさいのコード化をおこなった。

1) 民族コード

各民族は, 標準的なアルファベット表記のほか, 5桁のコード番号によってあらわすことにした。具体的な例でしめそう。台湾のYamiの民族コードは08304である。上2桁は大地域コードであり, 東南アジア・オセアニアには13のコードがある。08はフィリピン・台湾をあらわす(表1参照)。3桁目は中地域コードである。大地域区

表1 民族コード表

大地域コード	大地域区分	中地域区分
01	マダガスカル	なし
02	アンダマン・ニコバル	なし
03	アッサム・ビルマ	アッサム/ビルマ
04	中国南部	なし
05	インドシナ・タイ	ベトナム・カンボジア/ラオス・タイ
06	大スンダ列島(含マレー半島)	マレー/漂海民/スマトラ/ジャワ/ボルネオ/セレベス
07	小スンダ列島・モルッカ	小スンダ/モルッカ/ハルマヘラ
08	フィリピン・台湾	南フィリピン/北フィリピン/台湾
09	ミクロネシア	東ミクロネシア/中部ミクロネシア/西ミクロネシア/辺境ポリネシア
10	ポリネシア	西ポリネシア/東ポリネシア
11	メラネシア	アドミラルティ/中部メラネシア/南メラネシア/東メラネシア/辺境ポリネシア
12	ニューギニア	パプア/イリヤン・ジャヤ/北ニューギニア/マッサム/トレス海峡
13	オーストラリア	中・西オーストラリア/北・東オーストラリア/タスマニア

分にふくまれる民族数が多い場合、あるいは必要に応じてこの区分をもうけた。大スンダ列島（大地域区分で06）のように六つの中地域をふくむこともあるし、中地域区分のない場合もある。フィリピン・台湾の場合は三つある（南フィリピン、北フィリピン、台湾）。下2桁は、各民族に対応するコードである。このようにして、すべての民族をコード化した（資料編を参照のこと）。民族コードをつける順序は、なんらの偏見なしに決定した。

2) 文化項目コード

分析の対象となる文化項目については、文化の諸分野ごとに選定した関係から、4桁のコード番号であらわすことにした。文化項目の選定についての項でのべた区分にしたがい、経済は1000番台、物質文化・技術は2000番台、社会・政治は3000番台、宗教・神話は4000番台、知識・芸術は5000番台とした。1000番台には、7つの大項目がふくまれるので、それぞれの大項目は、1100番台、1200番台、1300番台、……1700番台のように区分される。各大項目にふくまれる文化項目は、下1桁ないし2桁の番号でしめした。たとえば、産小屋（2112）は、物質文化・技術分野にふくまれる大項目、家屋（2100番台）のなかで、12番目の文化項目ということになる。文化項目コードについても、コードの順序になんらの恣意性はない。

3. ワークシート

じっさいに文献を通じて、ある民族集団が所与の文化項目を有しているかどうかを確認し、具体的な情報として集積し、さらにコンピュータに入力するためのワークシートを作成した。ワークシートをつくるさいに、いくつかの点が問題となった。入力の対象となる民族と文化項目の数が、それぞれ数百以上のオーダーにおよぶことがあらかじめわかっている。しかも、ワークシート自体が単に記入するのに便利であるようにという条件だけでなく、コンピュータ入力にも適した体裁をもっている必要があった。こうした点を考慮し、1枚のシートが27ある大項目の1項目ごとに構成されているA4サイズのワークシートを作成した。

このワークシートには、特定の文化項目の有無を民族学的現在、あるいは過去別に記号（○あるいは×）で記入する欄がもうけられている。さらに、記載事項を確認するうえで便利ないように頁数を記入する欄と備考欄をもうけた。

ワークシートの一番上の頁には、それぞれの文献の内容の偏りを把握するため、記入者の判断で、記述程度がくわしい、ある程度ある、ほとんどあるいはまったくない

といった情報を記入することとした。記入されたワークシートは、各民族ごとにファイルし、次節で杉田がのべるような方法でコンピュータに入力された。

4. カ ー ド

使用した文献と選定した民族に関する情報を検索用にもちいることができるよう、体系的に整理しておく必要があった。そこで、民族、文献のそれぞれについてのカードを作成した。以下、民族に関するカードを民族カード、文献に関するカードを文献カードと称する。カードのフォーマットについては横山が担当して原案をつくり昭和56年度の第2回研究会において全員の討議をへて決定された。

1) 民族カード

民族カードは、各民族の基本的な情報に関するいわば登録表とでもいえるものである。その内容としては、民族名およびその別(他)称、民族コード、位置(南緯/北緯、東経/西経)、言語、居住地(山地、平地、海岸、島嶼)、人口(年度を明記)、利用した文献、の7項目についての情報をふくむ。言語については、東南アジア大陸部用のカード(緑色)と、東南アジア島嶼部およびオセアニア地域用のカード(黄色)に2大区分した。さらに、それぞれのなかにふくまれる言語を、10の言語群に区分した。言語系統に関して異説がある場合を考慮して、言語の区分は最小限にとどめることにした。

2) 文献カード

資料としてもちいた文献は、各民族ごとに最低1編ふくまれる。ワークシートの記入は文献1編ごとにおこない、文献カードもそれに応じて作成した。文献カードには対象となる民族名、民族コード、文化項目(文献にふくまれる内容)、著(編)者名、文献名、調査時期、位置、記入者、所蔵機関などの項目について記述した。使用した文献の言語は、英語、中国語、ドイツ語、フランス語、日本語にわたっている。文献カードは、ピンク色とした。

5. 地 図

ある特定の文化要素が東南アジア・オセアニア地域でどのような分布をしめすのかといったことから、地図上にあらわすことによって端的に理解することができる。

さらに、複数の文化項目の重複分布についても、地図上にあらわすことによって理解が容易になる。そのためには、地図入力用の原図をつくる必要があった。

東南アジア・オセアニア地域を1枚の原図としてあらわすべきであったが、民族の位置を記入するうえで縮尺の異なる2枚の地図をもちいるべきと判断した。そこで、市販の東南アジア、大洋州の地図をもとに、各民族の位置を記入した白地図を作成した。白地図のサイズは、縦62センチ、横87センチであり、地図上には、海岸線を黒実線、河川・湖沼を青実線、国境をピンク色の一点破線で、さらに主要な都市名、首都をそれぞれ黒丸、赤丸でしめした。

地図自体の縮尺についてふれておこう。東南アジア地域のものは、850万分の1（単円錐図法で、北緯10度の縮尺）であり、オセアニア地域の地図については、縮尺2600万分の1（ゴール図法で、赤道縮尺）である。さらに、各民族の占める位置を地図上に点としてプロットした。民族の居住する地域が地図上で一定以上の面積を占める場合は、その代表点（都市とか人口の多い地点）を指定した。

つぎに、上記の白地図を元にして、東南アジアとオセアニアとの2枚の地図画像をコンピュータに入力し、あわせて各民族の位置と民族コードを入力した。このデータと、ワークシートに入力した各民族ごとの文化項目データとを組みあわせることにより、特定の文化項目の分布をモニターの地図上に出力し印刷することが可能になる。資料としてあげた各文化項目の分布図が、このようにして作成された。